

キレル生徒についての一考察

A Study of Short-tempered Students

青木 憲樹

はじめに

教育の問題は、現在山積している状況である。いじめ、犯罪の低年齢化、不登校など様々な問題が、教育のゆがみとされている。しかし、全てが教育で解決できるとは考えられない。教育万能主義の考えに直ちには、同調できない。現代社会の特徴は、効率優先のために如何に早く、如何に簡単に、如何に楽にという傾向が見受けられる。しかし、効率的な教育では、生徒の健全な育成は困難である。人間は、様々な経験を通して長い年月をかけて、徐々に成長するものだからである。効率的な教育を追求してきた現在の教育の結果、様々な問題が生じてきている以上、やはり教育の問題と言わざるを得ないのではないか。現在問題となっているいじめ、不登校、校内暴力などは、教育の本質に関わる問題であると考えられる。なぜなら、教師と生徒の健全な関係が教育の営みには不可欠である。ところが現在は、教師がどのように生徒を捉えるか、生徒が教師をどのように捉えるかが相互に大きく乖離してしまった。そのためにこのような問題が生じたと考えるからである。

現代の生徒の特徴は、すぐ「キレル」生徒が多いことである。「キレル」とは、「正常な判断力を見失い、自己抑制力がきかず、キレルと重大な事件に発展する¹⁾」。なぜ「キレル」かについては、様々な要因が考えられる。キレルと言うのは、要するに自分の中でタガが外れたり、不愉快な刺激を受けた場合、抑止力がなくなり、理性的な行動がとれなくなって発作的な情動がおこる現象に対して使われている表現である。最近では小・中学生に対してキレルという言葉がよく使われるようになってきている。

キレル要因として、「①普段の生活の中で自分の欲求不満をどのように表現し、主張するか身につけていない。②情報メディアへの過度ののめり込みから、仮想世界と現実とを混同する。③家庭での過保護、甘やかしすぎで、主体性や自主性が育てられていない。④学校生活での自己表現や活躍の場が確保され

ず、教師の指導に反発する¹⁾」などが考えられる。また、「食生活²⁾」や「ストレス³⁾」を挙げる研究者もいる。しかし、人間が社会生活を送る上で、何らかのストレスを受けざるをえない。同じストレスを受けても、キレル生徒とキレない生徒がいる。同じような状況にあっても、一方で感情的にキレて、他方でその状況を何とか乗り切ろうとするか対応は別れる。その差は、その物事や状況に対する考え方・捉え方の違いによると思われる。

例えば、非常に困難な状況に陥ったと本人が捉えた場合、その困難な状況が自分の能力では解決不能であると判断した結果、自分ではどうにもならないので、その困難な状況から逃れるためにキレルと考えられる。その困難な状況を何とかして克服しようとか、どのようにしたら解決できるか努力しようとは考えられない。この状況から抜け出すことはできない。そして、この困難な状況が永遠に継続すると思ひこんでしまうところに問題の根元があると考えられる。このような状況に陥った場合、どのように対応したらよいのであろうか。困難であるという状況の捉え方は一人ひとり異なっており、それはあくまで個人の主観的判断である。しかし、その困難な状況が、全く改善の余地のない絶望の状態だと捉え、どうしていいか分からなくなり、キレルのであろう。そのようなことから、物事に対する捉え方を変えることによって感情的にきれることを回避できるのではないかと考える。

心理学には、論理療法というカウンセリング理論がある。論理療法とは、「非合理的・非論理的な思考を見つけて取り出し、それに有効な反論を加えて、しだいに考え方を変えさせ、人を自滅の方向から救い出し、さらには適切な感情と思考を取り戻すことを通じて、人がよりよき自己実現、幸福な生活に向かうのを援助しようとするカウンセリング理論⁴⁾」である。

本稿では、キレル生徒がキレなくなるにはどうすればよいか、論理療法の考え方を応用し、生徒に接

するための基本的な心構えを考察することが目的である。

生徒の現状と問題

(1) キレル生徒の増加

文部科学省の調査では、全国の公立小学生が、平成16年度に学校内で起こした暴力行為は、1890件で前年比18%増加していることが明らかになった（平成17年9月23日付朝日新聞）。このうち、教師に対する暴力は336件の過去最多で、前年度の253件から33%の大幅な増加となった。小学生の対教師暴力の件数増加について、文部科学省は「小学校では学級担任が子どもの問題を一人で抱え込み、学校全体や関係機関と一緒に取り組めない。結果的に問題が放置され、同じ児童が暴力を繰り返すケースもあるのではないかと分析している。

小学生が、教師に暴力を向ける背景として、家庭内暴力や感情にブレーキをかけられない生徒が多くなったことが考えられる。

現代の生徒は、非常に短絡的な傾向がある。じっくり考えることができない。じっくり考えることができない要因の一つとして、コンピュータゲームの影響が大きい。そして、攻撃の対象が友人や家族などに向かう傾向がある。対教師暴力もその一端を表している。

現在、生徒の問題の背景として、学校における競争システムがあると考えられる。学校の競争システムは、恒常的な競争状態にあるのである。生徒は、常に他者と競争していなければならない。生徒は、「いつ自分が落ちてしまうかわからない不安感をいつも抱えていなければならない⁵⁾」のである。このような競争システムでは、成功者といえども常に不安を感じているということである。いつ成績が悪くなって順位が落ちてしまうかもしれないという不安感を生徒は持ち続けるのである。

キレル生徒の中には、いわゆる「よい子」も少なからずいるのは、成績優秀者であっても、常に強い不安感を抱えて生活していると、自己否定的自己像を形成し易いということである。

(2) キレル生徒とは

「キレルとは、衝動行為⁶⁾」である。衝動行為とは、発作的な瞬間的な状態である。大人でも非常に感情的になり、キレた様な状態になることがある。しかし、大人には自己抑制力があり、社会生活を送る上で感情的になっても、それがすぐ行動にあらわれる

ことは少ない。自己抑制力というのは、その人が置かれた状況において、自分の中で思考してどのような行動をするかを判断し、衝動を抑え、合理的に行動する力のことである。自己抑制力は、言葉の力でもある。人間は言葉で思考する。言葉とともに体験を通じて、様々な状況判断力ともいう総合力を形成するのである。つまり、人間は言葉と体験を通して自己抑制力を学んでゆくのである。真の意味での言語的思考というのは、体験と言葉がドッキングして発展してゆくものなのである。ところが、言葉だけだと実体験の裏付けがなく、真の意味での自己抑制力は育たないのである。

平成16年に起きた長崎県佐世保市女子児童殺害事件で、事件を起こした少女のインターネット上の記述では、非常に語彙が多岐にわたり多いことが分かる⁷⁾。現代の生徒は、非常に語彙は多い。インターネットをいつも使用しているので、情報のシャワーを常に浴びているともいえる状態である。問題なのは、語彙の多さではなく、それを裏付ける実体験の少なさである。言葉が実体験が少ないために単なる観念的な頭の中だけのものになってしまっているのである。そのため、真の意味の自己抑制力は育っていないのである。

(3) キレル生徒の生育歴

①文部科学省が発表した「『キレル』子どもの成育歴に関する研究」（2002）では、キレた子どもの80%近くに「過保護」、「過干渉」、「放任」といった家庭での不適切な育児があったことが分かった。

この中で60%以上の子どもの両親の離婚や家族間の不仲など「家庭内の緊張状態」があり、家庭内で「暴力・体罰」を受けた子どもも24%いた。

キレル子どもの大半は、ささいなことに我慢できないタイプで、その家庭では、母親が子どもを過度に統制しようとするのに対して、父親は育児に無関心なタイプの組み合わせが多い。

過干渉・過保護な母親は、大切な子どもに怪我をさせないことが正しいと考え、常に先回りして子どもが怪我をしないように指示する。すると、子どもは、常に親に同意を求める自主性のない子どもになってゆくのである。その結果、自由な自発的な衝動を常に抑えられて成長した子どもは、自主性のない依存症の傾向を持つようになるのである。即ち、自分自身で生きていないのである。そして、依存症の子どもは、何かあると責任を全て他者に転嫁するようになる。悪いのは、自分ではなくすべて親である。

なぜなら、「今まで全て親の言うとおりに生きてきたのだから」というようになるのである。また、このような状態では、子どもは常にエネルギーを発散する場所を制限されているわけであるから、成長するに従い自我が確立してくると、親子のつながりがそれまでの「絆（きずな）」から、重い「鎖（くさり）」へと変化してくるのである。子どもは、エネルギーを思う存分発散し、自分の好きな事柄に熱中してこそ、充実感を味わうことができる。金盛は次のように述べる。子どもは「どんな形であれ外に向かって、周囲の誰かに向かって、何らかの形で表現や訴えをできていれさえすれば、生きていけると実感でできる⁸⁾」ところが、過保護・過干渉であることによって、常に欲求不満の状態にあるわけである。

幼少期にはいい子だった子どもが、思春期以降、思いが通じないと爆発する。両親が問題に正面から対処しようとするとう改善されるが、父親が母親に責任転嫁すると、悪化しがちであることが、この研究で指摘されている。

次に多いのが、衝動的で自制心に欠けるタイプで、家庭で日常的に虐待を受けていることが多かった。こうした場合、「抱きしめる」「話を良く聞く」といった接し方を変えるだけでも状況が改善しやすいという。

②家庭裁判所調査官研修所では、平成12年度に家庭裁判所で扱った少年による殺人事件及び傷害致死事件を素材としてその背景や原因を実証的に分析する研究（「重大少年事件の実証的研究」）を行った。

重大事件を起こした少年については、少年の内的要因や少年を取り巻く環境要因が長年にわたって複雑に絡み合っていることが明らかとなった。そこでは以下のことが指摘されている。

ア. 犯罪を起こした少年に共通する特徴

・追いつめられた心理状態

犯罪を犯す直前では、主観的には追いつめられた心理状態となっていた。

・問題解決能力の不足

観念的な考えが目立ち、柔軟な考え方ができず、自分のやり方に固執する。

・共感性の不足

快・不快という未熟な感情しかなく、相手の気持ちを感じ取ったり、自分の気持ちを伝える能力が乏しい。

・自己イメージの低さ

自分はダメだという意識が強く、劣等感を強

く抱いている。

・ゆがんだイメージ

「男らしさ」は「攻撃性」であるというゆがんだイメージを持っている。

イ. 家族の特徴

・余裕のない親

親に精神的な余裕がなく、子どもの問題行動に気付いても、子どもの性格や気持ちを考えず、体罰と叱責を加えるのみで適切な対応ができない。

・「しつけ」と「虐待」の混同

しつけの名のもとに子どもに親がひどい体罰を行ったり、親が支配的なしつけを行って、家庭が子どもにとって「安全」な場所になっていない。子どもが親に対して恐怖感をもち、大人が近づくと正常な人間関係を築けない。

・親の期待の大きさ

親の期待が大きすぎ、子どもらしいありのままの感情を自ら抑えてしまう。また、子どもが挫折しても、親の期待の大きさのために傷ついている子どもの気持ちを察することができず、健全な親子関係が築けない。

・コミュニケーションの欠乏

家族とのコミュニケーションが乏しく、家族間に大きな不満や深刻な葛藤が存在している。特に父親が父親として役割に消極的であり、母親と子どもが密着しすぎて、却って安定的な親子関係が築けない。また、父親が大人として未成熟なために子どもに安定した父親像を提供できない。

(4) 生徒の思考のゆがみ

キレる行動の前段階として、生徒の思考のゆがみがある。なぜなら、冷静で、合理的な思考ができるのなら、キレないからである。過度な思い込みが人間の思考を停止させる要因である。これをオーバーゼネラリゼーション (over-generalization)⁹⁾ という。これには、以下のものがある。

①二分思考

自分の状況を善悪、成功か失敗、黒か白か、と常に極端な決め付けを行ってしまう思考である。

我々の生活は、常に善いか悪いかを決められるものではない。生活のほとんどが、善悪を判断できるかどうか、曖昧な状況にある。それを極端に善悪を決め付けてしまうのである。

自分の行為の判断は、常に相対的なものである。その相対的なものに対して、絶対的な判断をするこ

とは、よくあることである。人間の思考は、通常自分自身の判断規準が軸になっている。その軸はその人がいつも持っている思考プロセスによることが多い。その思考プロセスは、無意識に形成されるのである。人間は「ある考えが選択されると、自動的に、つまりは無意識的に思考回路が出来上がって、それによって思考が勝手に進んでしまうというメカニズムを脳の奥のほうにもってしまふ¹⁰⁾」のである。

②悲観的思考

自分の置かれた状況に対して、常に最悪の結末を想像してしまう思考である。些細な障害や困難から、大きな障害や困難を想像してしまうことである¹¹⁾。

③決め付け思考

ごくわずかな事実や出来事から、全てのことを「決め付け」てしまう考え方である。

④選択的抽出思考

自分が関心を持っている情報ばかりが気になって、他の情報に目がいけない。自分に関係のある特定の事柄だけを選択し抽象的に意味関連をつけて結論を出してしまうのである。

⑤肯定面の否定思考

物事には、肯定・否定の両面がある。肯定だけ、否定だけということは少ない。しかし、物事の否定面のみ捉えて、自分の思考を限定してしまう考えである。

⑥恣意的推論

思いつきや先回り、独断など根拠のないことをあると信じたり、その思いつきで行動することである。

⑦拡大視・縮小視思考

自分に関心のあることばかり大きく考えてしまい、自分に関心のないことを縮小して考えてしまう思考である。

⑧感情的理由付け思考

その時の自分の感情状態で、物事の意味関連を思考する。

⑨誤ったレッテル思考

自分の失敗や不完全さを理由にして作り上げた否定的イメージを固定化して、全ての事象に適用してしまう思考である。

⑩自己関連付け思考

自分とは本来関係がない出来事や事実を、自分に責任があると判断してしまう思考である。

⑪自己成就的予測

否定的な予測や見込みをすることによって行動が抑制してしまい、その結果自分の否定的予測が実現する。そのようなことが積み重なることによって、

自分の否定的予測や見込みを確信し、自分の固定観念を形成してしまう思考である。

キレル生徒への対応策

(1) 教師の対応を変える

キレルのは生徒である。しかし、キレル状態に陥ったのは、そのようになる経緯があったと思われる。そのような状況や環境を変えることが必要である。それは、生徒を追い詰めた状況を把握することがまず第1になる。教師が感情的に対応してしまうとますます事態はこじれていく。教師が広い視野と余裕を持って接すれば生徒も安心できるようになると考える。

教師とキレル生徒の親との相互理解は、非常に重要なことである。生徒を理解するためには、やはり親との面談は不可欠である。親と生徒の相互理解なくしては、キレル生徒を理解することは、困難なことが多い。ただ、注意しなければならないのは、親と面談したからといって、解決策が直ちにみつからないことが多いということである。キレル生徒にとって、家庭環境が大きな影響を与えることは当然である。しかし、実際、両親と面談してみると、両親共に真面目で一生懸命仕事をし、子育てをしてきたのではないと思われることもある。何度両親と会っても解決しないケースも多々あるのである。だからといって、家庭訪問などは、効果がないわけではない。教師も両親も生徒のことを真剣に考えていることは必ず伝わっているはずであるからである。

(2) 思い込みであることを知らせる

キレている生徒は、自分の思い込みに気がつかない。それを教師は指摘してあげることが重要である。生徒に思い込みであるということを指摘する場合、教師が生徒よりもレベルが高いことが要求される。なぜなら、生徒と同様かそれ以下であると生徒に引きずられる可能性があるからである。

開き直ることができさえすれば、自分の思い込み思考に終止符を打てるのである。「どうでもいい」と思えば事態が悪化することはない。開き直ることができないからこそ、キレルのであり、「どうでもいい」と思えないからこそ解決不能の思い込みに陥るのである。この悪循環を断ち切るためには、その基本的な対応に於いて、その悪循環の糸を断ち切らなければならない。

思い込みをどのように知らせるかについては、質問をすることが有益である。命令や指示をしても本人が気付かないことが多いからである。生徒本人が

気付くような質問は難しいが、教師が冷静に質問をすれば、生徒も冷静になってくる。教師が冷静に質問をすると、生徒は冷静に答えてくれることが多い。注意しなければならないのは、教師が対等な立場で質問をすることが求められているということである。最近の生徒は、命令や指示を嫌う傾向があるからである。教師が上で、生徒が下であるという意識で質問をしても、反発はしても生徒に気付かせることはできない。

(3) 可変的・複眼的思考への転換

生活体験の少ない生徒は、偏った思い込みを持ちやすい。このことを教師は自覚して対応する必要がある。知識・経験は教師の方が優れている。しかし、問題なのは教師自身も、自分の知識・経験に制約されて可変的・複眼的思考をとれないことである。このことを自覚しながら、生徒に対応しなければならない。

キレル生徒への対応は、その背景となっている状況を排除する努力とともに、教師の対応が非常に重要な要素となる。キレル生徒は、感情的になり解決不能な思い込みに陥っており、合理的・理性的判断が停止している状態である。冷静な合理的・理性的な状況判断とそれに対する合理的・理性的認識に至れば、自己抑制力が発動しキレルことはない。学校生活において、大人である教師の存在は生徒に非常に大きな影響力があるのである。

キレル要因・背景をなしている家庭環境・友人関係などに対する可能な限りの改善を図ると同時に、非合理的な思い込みに陥らないような対応が必要である。

その時に接する教師の対応は、生徒に引きずられないような広い気持ちと余裕のある態度、すなわち、生徒がキレずにすむような安心感を得られるような冷静で合理的・理性的な対応が必要である。

しかし、そのような時の対応は、往々にして教師も感情的になることが多い。すなわち、教師自身も実体験が少ないため、問題が生じたときにどのように対応してよいか判断や対処に困難を感じてしまうのである。教師自身がトラブルに慣れていないので、生徒のトラブルに対して可変的・複眼的思考に心がけていることが必要である。

(4) 思考の記述を転換させる

思考は言葉で行う。思考は、その状況に応じて瞬間的に記述される。その瞬間に冷静な合理的な記述は困難である。例えば「なぜ、A君はこんなになっ

てしまったのだろう」とか「彼は、やはりダメだったのだ」とか感情的な記述をしてしまうことが多い。客観的な記述ではなく主観的で感情的な記述である。これを止めるのは非常に難しい作業である。しかし、そのような記述の後で、客観的・合理的な記述に変換することができる。

つまり、「A君は、～をした。」「彼は、～を話した。」というように感情的な部分を全て削ぎ取った記述をすれば、感情に影響を与えない。

教師の方が、広く大きな気持ちで受け止めることができれば、キレル生徒を安定的な精神状態を保てると思う。

教師が、実際に自分が思っていることを紙に書いてみることである。そして、その記述の中で感情的な部分を排除することが必要である。すると、冷静で合理的・理性的な事実を確認することができる。如何に思い込みで現象を捉えているかが、明らかになるのである。

教師が生徒の関わりのプロセスを記録することが要求されるのである。生徒一人ひとりの個人記録を作り、その生徒との関わりを記述しておくのである。そのプロセスを自分の考えていることや感じていることをありのままに記述することである。ありのままに記述しないと自分の欠点が見えない。ありのままの記述の中に感情的な部分、思い込みの部分排除してゆかなければならない。そのような作業を繰り返してゆくと、教師は如何に生徒を思い込みや感情的に捉えていたか理解できるようになってくるのである。

おわりに

キレル生徒の増加は、学校にとって非常に大きな課題である。特に教師暴力の増加傾向については、学校にとって深刻な問題である。

キレル生徒の背景・要因を一つひとつ除去し、改善してゆけば、生徒は安定した学校生活を過ごすことができる。しかし、そのキレル背景にあるものが、例えば家庭内暴力の存在であるとする、家庭の協力が不可欠であることは間違いない。教師は家庭の理解を得るために、まず最初に家庭との信頼関係を形成し、子どものためにどのような家庭生活が必要かを粘り強く両親に説き、家庭との協力体制を構築しなければならない。

生徒がキレルのは、様々な要因・背景によって、生徒自身がその状況を解決不能と思い込み、どうしてよいか判らなくなるからである。すなわち、生徒

がその状況を解決不能であると思込んでしまうことが問題である。生徒がその状況を解決不能と判断するのは、逆に言えば、生徒がその状況を解決可能と思えないということである。つまり、キレる生徒は学校生活で解決可能な経験・体験を積んでいないということである。学校生活の基本は、学業である。学業において、生徒が成功体験を積み重ねていけば、状況を解決不能と捉えることはない。

学業における生徒の失敗体験の積み重ねが、生徒に解決不能の思い込みを形成するのである。学業における失敗体験が積み重なって、それが過度に一般化されると固定観念になり、何事においても、解決不能の思考回路が形成されてしまうのである。

小学校において対教師暴力が増加しているのは、教師が生徒の解決不能の思い込みを形成している直接の対象であるからである。生徒が問題状況に陥ったとき、教師が解決してくれるという安心感と信頼感があれば、キレることはない。生徒が具体的状況において、解決不能であり、誰も助けてくれないという絶望感を持ってしまうところが問題なのである。

生徒が、失敗体験ではなく成功体験を積み重ねていけば、状況を解決不能とは判断しない。失敗体験とは、生徒が課題に対して挑戦し、その結果に対して教師が失敗であると判断し、生徒がそれを失敗であると認識し、受け入れることである。生徒が成功体験を積み重ねるということは、教師が生徒のありのままを認め、よいところを伸ばしていく努力を積み重ねることである。教師が生徒よいところを見つけ伸ばそうと試みて、生徒のよいところが少しでも伸びれば、それは成功体験となる。教師が生徒の成功体験を積み重ねる努力をしていけば、生徒は教師に対して、安心感と信頼感を持つようになる。

教師が生徒を比較し競争を助長すれば、生徒は教師に対して安心感をもてない。生徒は教師が求めているのが、成績のよくない生徒よりも成績のよい生徒であると判断するからである。成績のよくない生徒は、教師を頼ることはできないという思考経路を持ってしまうのである。また、成績のよい生徒も、自分もいつ成績が悪くなるかもしれないという不安を感じざるを得ない。教師が生徒の学業成績のみに重点を置いていけば、教師に対する安心感と信頼感が喪失せざるを得ないのである。

生徒同士の関係においても、常に競争関係ではなく、協力関係にあるという認識をクラスの中で形成しなければならない。クラスの生徒一人ひとりが互いの足りないところを補い、助け合うという共通認識を常に持っていけば、生徒は安心感をもつのである。ところが、クラスの全体が常に競争関係にあれば、生徒はクラスメイトに助けを求められない。クラスにおいて精神的に孤立した生徒は、問題状況を解決不能と思込んでしまうのである。

生徒がキレないためには、学校生活において教師は生徒のあるがままを認め、よいところを伸ばす努力を積み重ねて、生徒が問題を解決不能と思込まないように注意しなければならない。また、教師は、生徒が互いに協力し、足りないところを補うようにクラス全体の共通認識を形成するように導かなければならないのである。

引用文献

- 1) 安藤忠彦他編：新版現代学校教育大事典2. ぎょうせい（東京）、429、2002.
- 2) 鈴木その子：キレるキレないは「食」で決まる。祥伝社（東京）、118、1998.
- 3) 影山任佐：普通の子がキレる瞬間。ごま書房（東京）、56、1998.
- 4) 伊藤順康：自己変革の心理学。講談社（東京）、12、1990.
- 5) 村上士郎：なぜ「よい子」が暴発するか。大月書店（東京）、71、2000.
- 6) 石田一宏：キレる子、キレない子。大月書店（東京）、16、1998.
- 7) 村山士郎：事件に走った少女たち。新日本出版社（東京）、56、2005.
- 8) 東京心理教育研究所「親の会」編集金盛浦子監修：母親の心の傷が癒されてゆくとき。青樹社（東京）、196、1997.
- 9) 伊藤順康：自己変革の心理学。講談社（東京）、15、1990.
- 10) 町澤静夫：コンプレックスという心理。日本実業出版社（東京）、98、1997.
- 11) 伊藤順康：自己変革の心理学。講談社（東京）、130、1990.